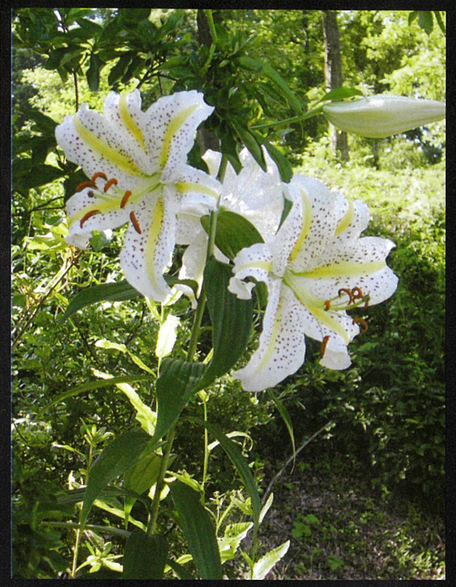
国指定史跡への経緯

杉山城跡はこれまで高度な築城技術から「後北条氏の城」として広く認識されていましたが、学術的な裏づけはありませんでした。そこで嵐山町では「比企中世遺跡検討委員会」の指導を得て平成14年度から18年度にかけて5次の学術発掘調査を実施しました。その結果、城跡の年代が15世紀末から16世紀前半であり、後北条氏の時代ではなく、それ以前の関東覇権をめぐる山内・扇谷両上杉氏と古河公方による三つ巴の抗争が繰り広げられていたなかで山内上杉氏により造られた城であったことがわかりました。

こうした学術的な成果により、杉山城跡が高度な築城技術の特徴をもち、良好な保存状態で当時の政治・軍事の様相を良く示していることが高く評価され「比企城館跡群」のひとつとして平成20年に国史跡に指定されました。



ヤマユリ
井戸跡から本郭西側にかけてヤマユリが自生しています。花の見ごろは7月上旬から中旬です。また、城跡一帯では、春の桜やツツジ、秋の紅葉が楽しめます。

雑木林
城跡の大部分は、クヌギやコナラなどを主体とする雑木林であり、貴重な里山景観となっています。

ボランティア
杉山城跡は、地元の杉山地区を中心につくられた「杉山城跡保存会」の活動のひとつとして毎年、数回大掛かりな下草刈りが行われたり、隣接する玉ノ岡中学校の生徒による遊歩道の整備、竹林の間伐などが行われ、地域と密着した保存活動が進められています。

問合せ　埼玉県比企郡嵐山町教育委員会 文化スポーツ課
〒355-0211 埼玉県比企郡嵐山町大字杉山 1030-1　☎0493-62-0824
嵐山町 HP　http://www.town.ranzan.saitama.jp
杉山城跡 HP　http://ranzan-sugiyama.jp/

国指定史跡

比企城館跡群 杉山城跡

杉山城跡は、戦国時代の山城跡です。鎌倉街道を見下ろす丘陵の尾根上におよそ10の郭を配置した縄張となっています。各郭は横堀や帯郭が囲み、塁線には折が連続します。木橋や土橋を用いた様々な形態の虎口（郭の出入口）には侵入方向に対し真横からも矢を射掛けて防御する横矢掛りが施されます。また、こうした高度な築城技術により、知名度が高く「築城の教科書」「戦国期城郭の最高傑作のひとつ」という評価がされてきました。

一方、城主や築城年代については記録がなく不明でしたが、平成14年からの発掘調査で城の年代や歴史的な背景がわかってきました。

埼玉県比企郡嵐山町

杉山城跡案内図

①搦手から見る高見城跡

②井戸跡

③南二・三の郭　食い違い虎口

④南三の郭　切岸と連続する折れ

⑤本郭から見る日光男体山

⑥東二・三の郭

⑦外郭の切岸

⑧大手と出郭

◆歴史的背景◆

戦国時代の初め頃、関東では関東管領山内上杉氏と同族の扇谷上杉氏による抗争がありました。「長享の乱」と呼ばれる一連の戦いのなかで、当時の嵐山町は、山内上杉方の拠点鉢形城（寄居町）と扇谷上杉方の拠点河越城（川越市）の中間にあり、長享2年（1488）には須賀谷原（嵐山町）で多くの戦死者を出す激しい戦闘がありました。

杉山城跡から出土した遺物の年代は、この戦いの少し後にあたります。杉山城は、旧城を再興した須賀谷城（『松陰私語』）とともに、山内上杉氏が扇谷上杉氏に対抗して築城したものと考えることができます。

戦国期城郭の最高傑作の一つ

本郭東虎口と石積み

本郭の東虎口は、方形に区画され、内側にはハの字形に広がる石積みが検出されました。この他にも本郭南虎口や北虎口、南二の郭南虎口など多くの虎口で石が使われていることがわかってきました。

本郭３号土坑の土層断面

この土坑は、一括して埋められていましたが、焼けた壁土、炭化物が多く含まれていました。

本郭南虎口と礫

南虎口の両側からは石列が検出され、また土塁裾に拳大の礫が集められていました。

本郭土塁の接合部での版築状況

土塁が直角に折れる部分の土層です。
右側の土塁を築いて粘質土を貼った後、左側の土塁を貼り付けていました。
土塁の構築方法がわかる貴重な発見です。

◆出土品◆

杉山城跡
比企郡城館跡群

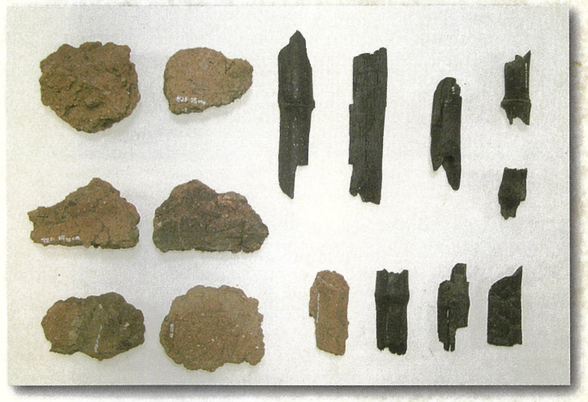
発掘調査ではさまざま遺物が出土し、15世紀末から16世紀初頭に近い前半という年代が得られました。

出土品には輸入陶磁器（染付・白磁・青磁・褐釉）、国産陶器（瀬戸美濃・常滑）、在地土器（かわらけ・火鉢）、石製品（硯・砥石・石臼）、銭貨、釘、錘、鍛冶滓、壁土、炭化財などがありました。

染付皿・白磁皿・青磁碗・褐釉壺

火鉢

かわらけの次に出土量が多く、威信財のひとつと思われます。



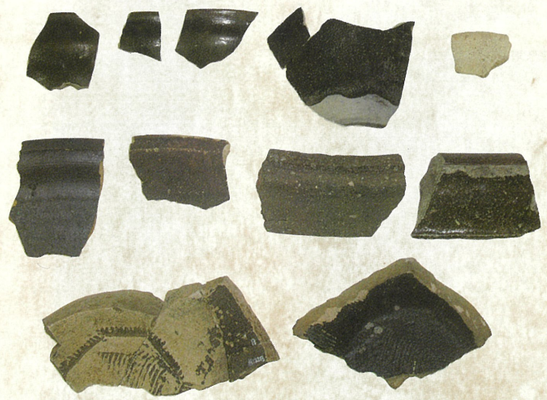
焼けた壁土とコマイの炭化竹

本郭からは大量の焼けた壁土とコマイの炭化竹が出土しました。南二の郭・南三の郭からも焼土と炭化物が出土していて、土器なども焼けた痕跡が多くみられました。
このことから杉山城跡は城の広い範囲で火災があった後、廃絶したと思われます。

かわらけ

出土した遺物の大半を占めたのが素焼きの皿・かわらけでした。かわらけはハレの器として正式の宴などで1回きりで使われたものです。

硯と錘、砥石



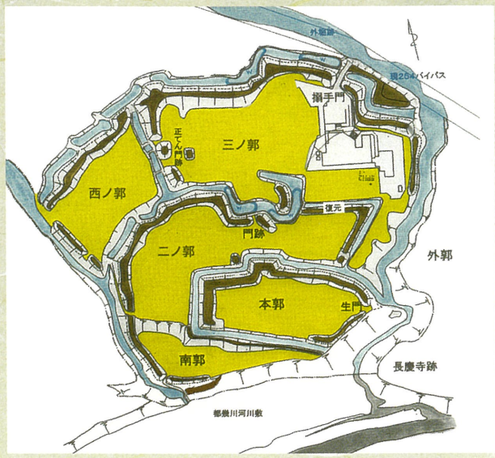
瀬戸美濃窯天目茶碗・すり鉢・小皿、常滑窯甕

比企城館跡群

比企地域には69箇所の城館跡があり、関東を代表する中世城館の遺跡群が形成され、城郭の博物館ともいわれています。これらのうち、菅谷館跡・松山城跡・杉山城跡・小倉城跡が城郭規模や築城技術等の特徴、良好な保存状態から「比企城館跡群」として国史跡に指定されました。

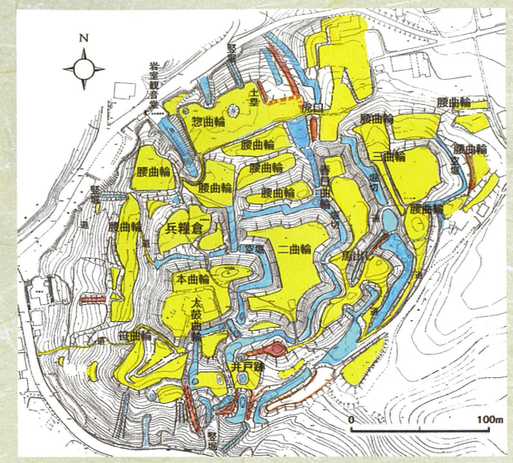
菅谷館跡

『吾妻鏡』に元久２年（1205）畠山重忠が「小衾郡菅谷館を立つ」と記され、鎌倉時代の名将畠山重忠の館跡として国の史跡に指定されています。しかし、現在の菅谷館跡の形は戦国時代の城で、須賀谷原の合戦の後に山内上杉氏によって再興された「須賀谷旧城」だと考えられています。都幾川の断崖上に本郭があり、二の郭・三の郭・西の郭・南郭が同心円状に配され、東西は自然の谷を利用し、深く堅固な堀で防御されています。発掘調査で出土した遺物の年代は15世紀末から16世紀前半を示しています。

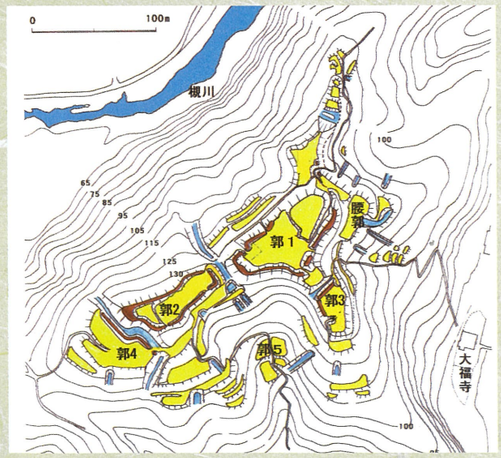


松山城跡

松山城は比企丘陵の先端に築かれた北武蔵地方屈指の平山城です。15世紀中頃から後半に、古河公方足利氏・扇谷上杉氏と山内上杉氏との軍事的緊張関係の中で築城されたと考えられています。その後、関東制覇を進める後北条氏の支配下に置かれ、永禄年間（1558～1569）以降は後北条氏・武田氏・岩槻太田氏によって城取合戦が何度も行われました。城主の上田氏は扇谷上杉氏の重臣でしたが、のちに後北条氏に臣従し、他国衆に位置づけられて所領を安堵されました。天正18年豊臣秀吉の小田原征伐によって落城しました。



小倉城跡

槻川が大きく屈曲する場所に張り出す丘陵上に築城されており、まさに天然の要害といえます。また、東秩父の大河原谷に向かう道の分岐点にあることから、交通の監視や遮断も大きな役割であった可能性があります。

この城の最大の特徴は、戦国時代の関東の城ではまれな石垣を随所に築いていることです。また遺構の保存状態が良好です。城主は後北条氏の重臣であった遠山右衛門大夫光影とする説と松山城主上田氏とする説とがあります。